

編集プロダクションに聞く.....1

(株)シュークリーム インタビュー

シュークリームは少女まんが専門の編集プロダクションとして、知る人ぞ知る存在。これまでも既存の少女まんがとは違う作品・作家を市場に送りつづけてきた気鋭の“編プロ”だ。今回、設立者でもある萬真理子氏に話を伺う機会を得た――。

インタビュー／飯島尋之

▼シュークリーム創設の経緯を教えてください。

萬 勤めていた出版社を退社してフリーで仕事をしていたときに、たまたま創刊スタッフとして祥伝社の「フィール」に携わることになりました。その当時はレディースコミックブームの時代で「フィール」も発行部数を伸ばしていたんですが、私のように個人で参加していると、いくら発行部数が伸びても雑誌全体の企画には関われないということに不満を感じるようになったんです。方針を決める編集長は別にいますから。そこで、当時の編集長に「フィール」の増刊の企画を持ち込んでみたら了解を頂きまして、「フィールヤング」を出させていただけになりました。それがうまく売れてしまって、すぐに月刊化ということになったんです。また、当時、ライターとして学習研究社の女性誌の仕事もしていたのですが、学習研究社の方たちも私が「フィール」の仕事をやっていることや「フィール」が売れたことを知っていました。学習研究社でも女の子向けのまんが誌を丸ごとやってくれないかという話をいただきました。『フィールヤング』と学研の雑誌と両方が立ち上がったものだから、出版社から会社

形態にしてくれという要望もあって、元々少女まんがが好きだった知人の編集者二人と私の三人で「シュークリーム」を設立しました。

▼出版社がシュークリームのような編プロを必要としていた時流があったと思いますか。

萬 時流というよりも、私が個人的に雑誌を丸ごとつくりたいという希望がまず先にありました。そうした気持ちとまんが誌のノウハウのない出版社が、まんが誌を出版したがっていた時期が重なった。私はもともと出版社でまんがも担当していて、そろそろ少女まんがを卒業してレディースを描きたいというまんが家さんを何人か知っていたこともあって、ラッキーなスタートを切れました。タイミングが良かったんですね。

当時は、作家を引っ張ってきたり担当したりは出版社の人間がやって、プロダクションの仕事は雑誌の中の一部のページを引き受けたり、原稿取り、入稿だけやるとか、コミックスの編集だけを請け負うとかいう形だったらしく、まだ、シュークリームのように企画を出して丸ごと雑誌をつくってしまうという仕事の形態は珍しかったと思います。そういった形態の走りだったので、版元さんからの

編集プロダクションの世界

シュークリーム が関わっている 主な雑誌



Zipper comic

祥伝社・季刊 '00年9月に同社から発行されているファッション誌「Zipper」の姉妹誌として創刊された。結構マニア好きな作家陣。



FEEL YOUNG

祥伝社・月刊 最も長くシュークリームが関わっている雑誌。以前よりレディース誌っぽい雰囲気消え、ヤング誌に近くなっている。



CUTIE comic

宝島社・月刊 正確には「関わっていた」雑誌。'00年5月号を最後に編集から離れたことで、多少の執筆作家の変化などがあつた。

注文も少なく非常にやりやすかったですね。当時は他の編プロの仕事のやり方をあまり知らなかったので、そういうやり方が特殊だとは感じませんでした。

▼現在のスタッフはどうやって集められたのですか。

萬 ほとんど新卒で採用しました。最初の頃は経験者もいましたが、まんがに対する方向性などが違ってしまい、いなくなってしまうました。最近はまだ好きの人が、学生時代からうちの会社の名前を知っていて就職したいと来てくれる場合も結構あります。編集したコミックスの奥付にもクレジットが入っているのです、それで覚えてくれる人も多い

ようですね。

▼シュークリームと出版社との関係はどのようなもののでしょうか。

萬 出版社によって違います。祥伝社の場合は表紙まわりなど雑誌の体裁から、売り上げや方向性の話もします。また、編集長には、部教会議などでアピールしてもらわないといけませんので、それに有利になる材料、例えば今この人が伸びてきて単行本も売れそうですといった情報などを提供しています。ただ、版元は出版社なので部数が落ちれば、誰かいます家がいませんかと、こういう人を入れてくださいという要望はきます。学習研究社の場合は「レモン」や「プチレモン」の

増刊という形で作ったので、そのイメージに合わせなければいけないという感じはありました。学習研究社の雑誌は結果的には休刊になってしまいましたが、そのときさらに増刊コードで作らせていただいたミステリー系まんが誌は、その後月刊化して8年ぐらい続きました。ベネッセ・コーポレーションの場合は「たまごくらぶ」「ひよこくらぶ」の別冊という形で「たまひよコミック」をつくったので、もともとのイメージが版元にありまからかなり細かく指示がありました。

うちは既存雑誌の増刊コードでスタートするものが多いので、もとの雑誌のイメージを守らないといけませんから、それに関する出

出版社からの注文は色々ありますね。「フィールヤング」は「フィール」創刊から自分が関わっていたので、とても楽だったんですが。

▼新しく仕事をする場合、出版社のほうから依頼があるのですか。

萬 例えば学習研究社の場合は、私があるが仕事の話をしているうちに学習研究社の方からうちでもお願いしますという動きになりました。ベネッセ・コーポレーションの場合、私に子供が産まれたことと「ママはぼよぼよザウルスがお好き」というまんが出てきたこともあって、育児まんがは面白いと。こういうまんがばかりの雑誌を一冊丸ごと作ってみたいと思いついて、企画しました。最初は「たまごクラブ」「ひよこクラブ」を作っている編プロに「たまごクラブ」「ひよこクラブ」の中のまんがとして企画を持ち込んだんですが、その編集長に面白そうだから雑誌丸ごと作ってみたいと言われて「たまひよコミック」としてうちで作ることになりました。宝島社の「キューティコミック」の場合は、初めて出版社のほうから依頼がきた仕事です。結果的に宝島社の「編集長」のイメージとうちで企画したイメージが合わなくなってしまう

い現在は関わっていませんが。

▼編集プロダクションの良いところとはなんでしょうか。

萬 シュークリームに関して言えば自由なところですね。これをやろうと言えば、すぐ動ける体制です。フットワークは軽いです。まんがが好きな編集者はたくさんいると思いますが、やりたいことがすぐできるという状況にいる人は少ないと思います。出版社の編集者だと編集長が替わると新しい方針にあわせてかなり細かく変えていかなければならぬので、作家さんと新しい編集長の間立って苦しむ人も多いようですね。作家さんに人気のある編集は出世できないという話も聞きますし(笑)。作家を守るといことは編集長の編集方針に逆らうということでもあったりするのです。うちではそういうことはあまりないけれど、守ってくれる人もいないので、たとえば雑誌の売れ行きが落ちて休刊になって保証がありません。自由度と引き替えのリスクですね。

▼編集プロダクションと出版社の違いとはなんでしょうか。

萬 通常は編集プロダクションから始まって、

一冊大きく当たる本を出して、そのお金で書籍コードを買って小さな出版社に移行するのが目標らしいのですが、うちの場合は最近、飛鳥新社と共同出版させていただくことになって、コードは買わなくても本が出版できる体制がとれたんですね。コードを買ってしまうと営業も自分たちでやらなくてはならないし、取次も自分たちで関わらないとならないし、印刷費も払わなければならない。とてもリスクが増えてしまってます。うちは代表者が2人とも現場のほうが好きなので、とてもそんなことができない(笑)。それでも会社を作った当時に比べれば現場オンリーという形では仕事をできなくなりましたね。

▼一般に編プロというと出版社の下請けイメージが強いですが、シュークリームの場合は対等のパートナーシップで結ばれているように感じます。

萬 そうですね。企画を出してプロデュースをしているのはこちらなので。ただ、こちらは資金力があるんです。そういう意味では版元さんにリスク負担をしてもらっている形ですね。こういう形の編プロはあまり見当たらないかもしれません。

共同出版事業

シュークリームは、「磯野家の秘密」「日刊アスカ」などで知られる飛鳥新社とすでに何冊かのコミックスを出版している。左の2冊の他、南Q太「あたしの女に手を出すな」、おかざき真里「バスルーム寓話」など、単行本未収録作品が収められることも多く、ファンだけに限らず見逃せない。今後とも要チェックである。

RIP
三原ミツカズ
飛鳥新社 952円



ネオンアンテナ
かわかみじゅんこ
981円

▼本当にまんがの仕事がしたいと思っている人にとっては、出版社よりはこういう場所での仕事をやるほうがいいかもしれませんね。

萬 まんがに限らず、編集を全部請うプロダクションは増えていくと思いますよ。テレビ番組を今はテレビ局ではなくてほとんど制作会社で作っているように出版社でも経営と制作が分離していく可能性は大きいと思います。作家も専属が減ってフリーの方が増えて、いろいろなジャンルのまんがができていますし。でも、まんが誌を出せば売れる時代も、まんがを出してない出版社が出すという流れも終わってしまった感じがするので、どうなるかわからないですね。

▼シュークリームは編プロですが新人の発掘もされてますね。

萬 やつています。うちの雑誌でデビューしたのは三原ミツカズさんですね。三原さんは「フィールヤング」宛の投稿でみつめました。持ち込み歓迎と雑誌に住所を出していますので、こちらに直接持つてこられる方もいます。新人とはちよつと違いますが、南Q太さんとかわかみじゅんこさんも小野塚カホリさんも、まだ1冊もコミックスが出ていないとき

に連載を依頼しました。

▼シュークリームとして今後の展開はどのようにお考えですか。

萬 今力を入れている「ジッパーコミック」がうまくいくと良いですね。「ジッパーコミック」が20代の新しい若い作家さんが出てくる雑誌になって欲しいと思っています。作家のラインナップには自信がありますが、まんがマニアの方だけでなく、ファッション雑誌は読むけど普段まんがをあまり読まないという人たちにも読んでもらえる雑誌にしていきたいと思っています。まんがマニアの方たちもうれいんですが、そういう方たちは単行本を買ってしまったあまり雑誌は買ってくれないので（笑）。また、「りぼん」でまんがを読むのをやめてしまった女の子たちが読んでくれるとうれしいですね。たくさんの方にまんがに戻ってきて欲しいんです。将来的には恋愛ものを絡めなくて良いようなマニア向けのものもつくってみたいという気持ちもあります。シルバーコミックもつくってみたいです。生涯まんがを読み続ける人もすでにいますから。